いずれ死に絶えるまでの過程

鬼意惨

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

産まれて何時か死ぬまでの過程

「何も分からないけれど」の外伝?的な立ち位置の作品ですので先にそちらを閲覧していただけると幸いです

全４話＋説明１話と短い予定です

目次

特異な産まれ ―― 1
産まれて、呪う ―― 11
呪い、継承する ―― 22
継承し、完成して、死に絶える ―― 36
説明 ―― 51

特異な産まれ

私は覚えている
幼い頃から特別だった
だから、覚えている
産まれた時から意識があったから
私を取り上げた老婆と、近くにいる女達の会話を
私は覚えている

おおよしよし、元気な女の子だねぇ
あぁ母娘共に無事でよかったよかった
それにしても、この娘は…才能があるね
落ちこぼれだったアンタがこんな娘を産むとは

鳶が孔雀を産むなんてねぇ…リディア？
ハァ…ハァ…ハハッハァ…エへへ…
この娘の名前も考えないとねぇ
どんな子に…っぁあ！マゼカ様、この娘耳が…！
んん？…あら、本当だねぇ。これで…何人目だい？
ええと――――１０人目ですね…!!
おや、思ってたよりも早く揃ったねぇ
歪みもここだけ、見てきた中では才能も随一…決まりだね
この娘が次代のスカァ様だぁね…今日はお祝いだ
ぁあめでたいねぇ、めでたいねぇ
特別豪華にお祝いしなきゃねぇ

私はスカァ＝フローンとして育った
リディアおかあさんは優しくて、暖かくて、大好き
クリスおとうさんも力持ちで、よく遊んでくれて、大好き
時折来るフィナ婆ちゃんも、私を見ると和かに微笑んで私の頭を撫でてくれた

学び舎に通うようになって、友達も出来た

出会った友達は、みんな変わった見た目をしてて

右手の指が6本あったり

片足が無かったり

頭が2つあるなんて子もいた

その中で私は片耳が潰れてるだけで

みんなより不自由に感じる事は無くて不安だったけど

みんな優しくて、遊ぶのは凄く楽しかった

おかあさんが迎えにきてくれて、手を繋いで帰り

今日は何を学んだ、こんな事を覚えたと自慢げに話すのは楽しかった

右のブラク君と左のグラト君は仲良しなんだ～、とか

マリナちゃんとこんな話をして、先生に怒られたとか

話しながら帰るのも、楽しくて好きだったけど

時折、大人の男の人が、すれ違う時に怖い顔で自分を睨み付ける事があって嫌だった

片耳が潰れてるといっても、あくまでも片耳だけだから
すれ違った後に聞こえた彼等の陰口も、嫌だった

何が次代の神だ、ふざけやがって

ある日、いつも通りお父さんと手を繋いで帰っていると
誕生日やお祝いする日に村のみんなで集まる建物から荒々しい声がしていて
耳の良い私は会話が聞こえていた

どういう事ですか！
私達の子供を意図的に殺すと!?それを受け入れろと！
そんな事許される筈が無い!!子供を何だと思ってるんですか！
お黙り、これはこの村に伝わる神事。我等を守る次代の神を産み出す為の儀式なんだよ
そんな事信じられるか!!
信じられるか？生贄って言葉をアンタら知らないとは言わせないよ？
っ――――――…！
そもそもお前達は嫁いで来た余所者、口出しするんじゃないよ
自分の子供の事なんだ！余所者だなんだじゃないでしょう!?
祖なる神の言った言葉に郷に入れば郷に従え、というのがある。この村に住むのであれば村の風習や決め事に従って貰わないとね…
だとしても納得出来ませんよ！そんな方法で今迄この村を守ってきたなんて聞いた事もない事を!!
――――――――！――――――!!!!

歩きながら聞いていて、聞こえない程に離れてしまったから

それ以降は聞き取れなかったけど。私にとっては十二分

この村の誰かを殺して、私達を守る神様?を産み出すなんて

優しかった村の人達からは想像もつかない惨虐性に怯えて寝付けず

その日の夜は両親と一緒に寝た事を覚えている

やがて魔法を習い始めて
みんなの中でも私が1番魔法が上手に出来た
羨むような視線と、しきりに褒めてくれる先生や両親
村の人達の声が私は嬉しくて、より努力していた
魔法を使えない子もいたけど、私よりも足は速いし、器用だし
使えない事自体が珍しい事で無いと教えられていたのもあり
変わらず仲良く遊ぶのは楽しかった
けどやっぱり、男の人達の目線や陰口は嫌い

何をヘラヘラ笑って…気味が悪い
あんな子供1人に何故…

今日は１０歳の誕生日

村のみんなが集まって、みんなでお祝いしてくれた

色んなプレゼントが渡されて、どれもが嬉しかった

その日の夜、お腹が痛くて、おかあさんに話そうと思った時

私の内股からどろりと赤い、血が見えて

何が何だかわからなかった、けど両親を心配させたくなくて

タオルで必死に抑えて、その後タオルは入念に洗って

お腹の痛みを耐えながら、眠りについた。でも

次の日の朝…ベットのシーツにも血がべったりと付着してしまった

洗い流そうにもタオルとは違う、これだけ大きな布なら両親には絶対バレてしまう

どうしようもなく、怖くて泣いてしまった

おかあさんが来て心配してくれて、もっともっと涙が出た

話すとおかあさんが、それは貴女が大人に成長している証拠だって

女の人は皆大人になるとこういう事が起きるって教えてくれた

その後、おなかが痛くなった時の対処法を教えて貰って

その日はおかあさんと一緒に寝た

暖かくて、良い匂いで、落ち着かせてくれた

そうかい、遂に初潮が来たのかい
さぁみんな、急いで準備しな。スカァ様が産まれる時は近いよ
これでまた、村の平和は守られるんだ
めでたいねぇ、めでたいねぇ
あぁ、ほんとぉにめでたいねぇ

産まれて、呪う

ある日、いつも通りみんなで勉強をしていると

今日は美味しい飲み物を用意したよ、とタエナ先生が言った

私達は目を輝かせて、お昼の時間が楽しみになった

そしてお昼に出た飲み物は、とても甘くて、すっきりしてて凄く美味しかった

みんなで美味しかった事を話しながら、また勉強をしてると

急に眠くなって来た。だめ、勉強中に寝たら、先生に怒られちゃう

でも、凄く眠くて――――――――

さぁ儀式を始めようねぇ

我等の神が、産まれる時だ

あぁめでたいねぇ、めでたいねぇ

――――――ズキン…とした痛みと共に、硬い石の床の中で目が覚める

いたい、いたぁぁいぃ

やだぁぁあ、おがあ゛ざん゛、、おどぅざん゛

みんなの悲鳴が聞こえる…！でも暗くて何も分からない

魔法で火を出して、辺りを照らすと――――

足の無いダリアちゃんの腕が、無くなってる
右腕の無いマリナちゃんの足が、無くなってる
両手足の無いレオくんは蹲って、咳き込んでる
ブラクくんとグラトくんは全身が大きく青く腫れてる
右足の無いコルトくんは足が無くなってる
指がいっぱいあったマーヤちゃんの腕が無くなってる
左腕の無いハンスくんは腕が無くなって、左足も無くなってる
足の長いミアラちゃんは足が無くなってる
口が歪んでたマグナルくんも全身がアザだらけになってる
…なんで？私だけ、何もない？
唖然としていたがみんなの悲鳴にハッとなって
慌てて詰め寄って魔法で治そうとしたけど
１０歳の私が出来る魔法じゃ止血が精一杯で

無くなった手足を治す、なんて事は出来なかった

っぐ…ひっぐ…痛いぃ、腕が痛いよぉ
…？ハンスくん、腕…無い、よ…？
でもいたいぃ、痛いぃ…
すっふすぅ…ふっふすぅ…おかあさん、どこぉ…
おかあさぁん…おとうさぁん…！
うわぁぁぁぁぁん!!!もうやだぁぁぁぁぁ！
…ぁ、…うぅ……

みんなで泣いた、おかあさんも、おとうさんも来なくて
みんな、落ち着けられる訳もなかった
目立った傷の無い私が何か喋ったら…怪しまれるんじゃって
怖くなって、声が出せなくて、ただひたすらにみんなの背中を
昔おかあさんや、おとうさんがそうしてくれたように
優しくさすってあげることしか出来なかった
そうして暗闇の中で時間が経って、みんなのお腹も鳴り始めた頃
部屋の天井から何かがガチャン、カラン、と落ちて来た
魔法で照らして見えたのは、刃物や鎖
そうして声が聞こえて来た、聞き慣れた声が

みんな、起きたかしら？
！先生ぇ!!!助けてぇぇ!!
先生ぇぇ!!!
ごめんね、それは出来ないわ
え……？何で…？
わ、私達…悪い事しましたか…？
やっちゃいけない事…何か…？
勉強中に寝ちゃったからですか…!?
いいえ、貴方達は悪くないわ
だったら…！
これから貴方達には、殺し合って貰わなきゃいけないの
へ……？

助けが来た、頼れる大人が、助けに来てくれた
みんなが安堵して、見出してた希望が
訳もわからず打ち砕かれて、私達は唖然としていた
殺し合う？私達が？何で？どうして？
何も、何か悪い事をした訳じゃないのに…
何でこんな目にあって、こんな事を言われなきゃいけないの？

生き残った最後の1人だけは出してあげるわ
何で…何でですか…？
はい？
何でそんな事しなきゃ、いけないんですか…？
みんなはね、神様になれるのよ
神、さま…？
そう、神様になって…村の平和を守るみんなの守り神になれるの、
でもその為には…貴方達には殺し合って貰わなきゃいけないのよ
そ、そんなの嫌です…
そうです！そんな事出来ません！
1週間前、外で兎や鳥を捕まえてみんなで解体のお勉強したわよね？
それと同じな訳…が…

そこで私は昔聞いたあの会話を思い出した
村の人を殺して、神様を産み出す
あの話は、これの事だったと今更気付いて
でも、何で私達が？勿論他の人なら良い訳じゃないけど
もはや家族と呼んで差し支えない程に
閉鎖的な村だからこそ強い仲間意識で結び付いている私達が
なんで、殺し合え、だなんて言われなきゃいけないんだろう

…そうよね、みんな仲良しだものね。そんな事したくないわよね
！じゃ、じゃあ…
仕方ないわ…仕方ないのよ、それでも、こうしてでも貴方達は殺し
合わなきゃいけないの
……？

さっき刃物とかが落ちて来たように、ボトリと、天井から物が落ちて来た
照らされたものは、男性の頭部
私達は悲鳴をあげて、落ちて来た頭蓋から離れたが
1人だけ、その頭部に反応した

……ミアラ、ちゃん…？どうしたの…
ッ――――――パパ…？
――――――――ドンッ
っ――――ヒッ…！
……う、か、かぁちゃん…？

ごめんね、でもみんなも悪いのよ

……パパッ！パパぁぁぁぁ!!

…先、生…？何で…？

貴方達には殺し合って貰わなきゃいけないの、さっきも言ったわよね？

や、やだ…そんなの――――――ボトッ

っ……あ、あぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!?リオォン!!

もう一度言うわ…『殺し合いなさい』

ッ――――――――…

レオくんは手足が無いせいで近くに転がってた人の顔を間近で見る事になって

マーヤちゃんは最近産まれてお姉さんになったって、張り切って可愛がってた赤子の顔を見た

何で…そう思うと、先生の話していた神様を産み出す為…に繋がる

みんなと殺し合うなんて嫌だ、でも何もしなかったら…

みんなの両親も、私の…大好きなおかあさんとおとうさんも…!!

そう、思ったら…みんな体が動かずにはいられなかった

善も悪もなく、絶望と悲鳴が入り乱れる中で

そう、せざるを得なかった

呪い、継承する

っうぅぅぅァァ!!あづあぁぁあああァァァ!!!

私以外に両手足が無事なマグナルくんと

ブラクくんとグラトくんが落ちて来てたナイフや鎖で

みんなを殺し始めた

マーヤちゃんはお腹を何度も刺されて

ダリアちゃんは首を絞められて泡を吐いて

マリナちゃんは背中を刺されて

レオくんも首を絞められて

コルトくんは蹴って反撃してたけど、胸を刺されて

ハンスくんはマーヤちゃんみたくお腹を刺されて

ミアラちゃんは両手があったから1番抵抗してたけど

…私は何故か殺されなかった

今思い返せば、あの時部屋を絶えず照らしてたのは私の魔法だから

私を殺せば魔法も解けて、暗闇に呑まれてしまうから、殺すに殺せなかったんだと思う

でももう残り3人、ブラクくんとグラトくんが私に馬乗りになって

私は助かりたい、生きたい一心で初めて人に向かって魔法を放ったら

ブラクくんがいなくなってしまって、グラト君も、火に包まれ悶えて、叫んでる

あの時の悲鳴と、人の肉が焼ける匂いは

今も私の耳に、鼻腔に残って薄れる事はない

ハッ、はぁっ…は、ぁぁあぁぁあぁあ…！
ひっ…く、来るな…来るなぁ…！
マグナル、君……わた、わたし、私ぃ…い、今…
来るなぁ！このバケモン！
っ――――――――――――

初めて人を殺した。人を焼き殺した

無我夢中だったから、グラトくんが焼け苦しんでるのに唖然としてただ現実を飲み込めず、困惑してたけど気付いて、自分の手が怖く

なって、怯えて

結果的に、グラトくんを死ぬまで長く長く苦しませてしまった事には気付く事も無かった

そんな私を、マグナルくんは拙いながらもバケモノと呼んで、恐怖した

7年一緒に遊び続けて、仲の良かった筈の私達は

お互いの優しさや思慮深さが無かったかのように、半刻と経たない間に、憎しみ合うようになっていて

その有様に私は絶望していた

…何で、神様はこの村を護るんだろう。次代の神様って…村の人達は言ってた

きっと私と同じ目に遭った筈なのに、何で村の人達を憎む事もなく村を護る為に神様として在り続けてるんだろう

そうしてバケモノと言われたショックで呆然としていたら

マグナルくんはナイフを首に刺して自殺していた

…はは、ハァ――――――？

その後私は部屋に入って来た人達に抱えられ、両手足を縛られて
村の端、絶対に入ってはいけないと両親や村の人達から
しきりに言われていた風変わりな建物の近くに寝転がされた
村の人達が逃げ去るようにいなくなった時、建物の扉が開いて
痩せ細った長い腕だけが伸びて来て、私を建物の中に運んでいった
その時私は怖くて、泣いて、必死で魔法を放った筈だけど

何も起きなくて、それが更に恐怖を助長させていた

ヒッ、ヒゥ…ゥ…？

…カカ、そう怯えるでない。何もとって食おう等とは考えておらんわ

…ゥ……だ、誰よぉ…

…お前達の言う村の守り神…リオメンスカァと俗に呼ばれる者だ

ゆったりとした服装で、皮と骨しか無さそうな程に痩せ細った声は
見た目とは裏腹に快活というか、今にも死にそうな見た目から出る
声では無かった
リオメンスカァ…と言ってるように聞こえたけど、聞いた事の無い
言葉
でも、そのリオメンスカァ…は、唯私に知識を授けると言って
様々な知識を教える事と、休憩の合間に私の衣食住を賄ってくれた
でも、出て来る料理はどれもお肉が入っていて
嫌いな訳じゃ無いけれど…飽きることもあった
私はこれから、次のリオメンスカァになる為の知識を教わる
魔法とは違う、呪い…呪術と呼ばれる知識を

リオメンスカァ…って名前は、貴方の名前なの…？
否、これは儀式に則って産まれた神の名。貴様に受け継がれる物だ
じゃあ…私も貴方みたいになるの…？
カカ、貴様が望むならそうもなろう…まぁ…貴様も自分の意思で、
自然とこうなるだろうがな
…？
今は知らずとも良いが、貴様は物覚えも良く聡い…自ずと理解する
だろう
…ふーん
さて、では教えの時間だ――――――

最初は怖くて、必死に魔法であの男を倒そうとしたけど

あの建物の中だと何故か魔法が出なかった

声に出さなくても出来るぐらいに、魔法のイメージは変わらず脳裏に焼き付いてるのに

なんでか出せなくて、その度に嘲笑う声が聞こえた

そんな中で、リオメンスカァは只々私に知識を授けた

人を呪うというのはどの様な事か、なんて魔法と変わらない様な基礎から

対象の魂を捕らえて遠くから、又は直接害する呪術

捕捉した魂から対象の情報を得る呪術

逆に自身の魂を守る為の呪術

掛けられた呪術を打ち消す為の呪術

それら様々な呪術を物に込めて、呪具と呼ばれる道具を作る為の呪術

そして習った事の全てを用いて、リオメンスカァと実戦を行う

私の呪術の才能は、リオメンスカァがリオメンスカァになる儀式を受けていた時

私にとって先先代のリオメンスカァから教えを受けていた時の自分よりも才能があるって言われた

この建物に入る前、私に掴まれた時お前は魔法を放とうとしたが、不発だったな
…それも呪いなんでしょ？
左様、それは今も変わらないが原理は理解しているか？
今考えられるのは…そもそも、魔法の発動の手順は先ず扱う魔法を鮮明にイメージする事だけど
体内の魔力は基本的に目に見えない、体の中に何となくでしか感じ取れない様な物。それを上手く操れる訳もない
だから知識を学んで、深めて、魔力というのが、魔法というのがどの様な事かを理解し素養を身に付ける
そうしてやっと体内の魔力を…例えば火に変換するイメージを得て
その火を自身が扱いたい形になる様想像しながら魔力を体外へ表出させる
つまり人は基本的に…例えるなら汗をかくように、体内の魔力を体表面から出す事が出来る機能が備わってる
一部の魔法を扱うモンスターってのもその機能を備えていて

尚且つ言葉には出来なくても魔法を扱う為の手順を本能で理解出来ているから扱える
…その上で私に触れた時か、建物が開いた時に私の魂に呪術で干渉して
魂を操って魔法を表出させる為の全身に有るだろう『穴』を閉じるとか、薄い膜でピッチリと覆うとかすれば
魔力は表出できず、魔法も放たれない
おそらく魔法を使えない人ってのはその表出させる機能が産まれつき備わってない人で
結果的に言えば、呪いで私の肉体を魔法を扱えない人と同じ状態にした…で合ってる？

…カカカカカ、概ね正解だな。やはりお前は私よりも才がある…いや、先代よりも有るかもしれんな
…そう
だが少し違う、お前の言う通り体内にあるあやふやな魔力を、理解し鮮明に想像出来る者は自ずと限られる
致命的に想像力に乏しければ、備えた魔力量が無に等しければ
産まれた環境故に素養が身に付かなければ…魔法は扱えん
ともすれば魔力を放つ為の穴を塞ぐ必要も無い
魔法を扱えぬ者とはそういう者達だ。誰であれ表出させる機能は備わっている
その上でお前は幸運だ
…そうなの？
魔法を学ぶことが出来る環境下で十全な素養を身に付ける事が出来
想像力に富み、潤沢な量の魔力を体内に保有しているのだ――
…裕福な家庭に産まれ素養が身に付いたとしても想像力に欠ける者
…本能で理解し想像力に富んでいても、魔力量が微弱な者
…無限の魔力を持ってしても、それを扱う術を知る事が出来ない者

そんな人間が数多く存在する中、お前は間違いなく幸運者だろう

そうして教えを受けて認められた日、私は…彼を喰らうことになる

想定以上…最短であったな。驚嘆する…そしてこれが私から贈ら

れる最後の楔だ
…箱――ッ、生きてる？何か、胎動してる
その箱の中には、我自身の力で抜き取った我の心臓がある
…え？
真にリオメンスカァとなる為に、先代の心の臓を喰らい糧とする。
そうする事で先代リオメンスカァを吸収する
そうする事でリオメンスカァは代を重ねる毎に、より強くなるのだ
…心臓である、理由、は――覚えてるわ。魂というのは全身に散らばっている…だからこそ呪術で干渉すれば例外はあれど指先まで意のままに操れる。そして――
人体の中で最も魂を多く保有するのが心の臓…カカ、本当に出来の良い弟子だったな
…でも、そんな事、色んな事は学んで身に付けたけど、人の心臓を食べるなんて…
であろうな、我とて当時は食えなかった
ならどうやっ――、そういう事ね
左様、貴様もそうするか？
――お願い、します…先生
…カカ、この期に及んで先生などと、呼びおるか

私は先生の呪術によって、操られるままに

肉体の拒否反応すらねじ伏せて、先生の心臓を喰らった

ぐちゃりとした生の食感と口に広がる血の味と生臭さや

噛み切って、口に含んだ直後はまだピクピクしてる肉の不快さに

どれだけ吐きそうになっても、体を操られ動かされるまま…

そうして飲み込み終わった時、先生は感謝の言葉と共に事切れた

でも、これで終わりじゃあ無いって

なら、次は何をするの…？

継承し、完成して、死に絶える

建物から出た時、そういえば、と気付いて

初めて会った時に掛けられていた魔法を扱えなくする呪術を打ち消す

そうすると、急に己の罪が顔を覗き込んで来た

アッあぁ…ぁあ！…っはぁ…！

今の今まで、感じなかった？気付かなかった？いや違う

これも先生の優しさ？

こんな感情を抱いたままじゃ…まともに何かを習うなんて出来る筈が無い

魔法を扱えなくしただけでなく、私の感情や感覚の一部に干渉して、自覚させない様に？してた？

この、脂の匂い…いつもの、食事に出されてツヴ――――
オエ゛エッはエッゲエエエエエ…
……ハァッ、ハァ、ハァ、ウォエ…エエ゛
――――なら…この匂いが、ひ、人を！焼いた匂いなら
……私が、食べてたのは…誰…!?

私が人を食べる事に違和感を感じない様にもされていた
でもそんな事よりも私が誰を食べていたのかが大事
ここまで色々な事が起きながら…今更になって赤の他人を…なんて筈がない
そう気付いた時には、私は走り出していた

ハァッ、ハァッ、ハァッ、ハァッ、ハァッ…！
おぉ…！リオメンスカァ様だ…継承なされたんだ…
リオメンスカァ様がお見えになるとは…ありがたや…
リオメンスカァ様…！
リオメンスカァ様ぁ…
ハァッ、ハァッ、ハァッ、ハァッ――――――ッ
ッ父さん！母さん！何処!?居るなら返事してよぉ!!
いない?……そんな、ま、でも…

必死で息を切らして帰った家には父さんも母さんもいない、それ自体は珍しく無かったが

両親がいない時は決まってお婆ちゃんがいた筈で

あの時どうしようもなく焦っている私には、呪術で魂を探る事なんて思いつかなかった

離れてた期間は…あの日から1ヶ月程度、でも私は何十年振りに帰って来たかの様に感じた

だとしても、安堵なんてできなかったが

そのままどんどん嫌な方向に、思考が回って来ながら

私は家の中を捜索した

今にして思えば…ハァ、毎食この匂いはしてた。一月、約９０食分…！

リビングのソファも変わってない…

キッチンの調味料の並びも…

この階段の登る感覚も…

両親の部屋――――――ッ！…誰もいない

なら、残るは自分の部屋――――――！…いない

家にはいない？なら…っ【魂魄探知】！――――

――――――――――…ぁ、ぁあ…！アアァ!!

今更になって思い出して、呪術で探る

生物には魂が普遍的に存在する、そして自身の魂の構成要素に強く影響を及ぼす者…つまり血縁者は

自身の魂を媒介に位置を辿る事が出来る

他者の魂を捕捉すれば他者の血縁者を探る事も出来る

…そしてそれは死体であっても

死んでしまえば魂は無くなる、なんて事は無い

確かに量は格段に減るが、物にも魂が宿る事がある

なら生物としては死亡し、物となった生物にも量は変われど魂は宿る、宿り続ける

だからこそ呪具の材料にする事も出来るのだ、と

そう教えられた事を、私はハッキリと覚えている

アァ……先生。先生は教えてくれませんでしたね

何で、この村の人々を憎まずにいられるのか

貴方も、先先代も、その前のリオメンスカァ達も同じ目に遭った筈

なのに

私は、私は、

そんなの耐えられる訳がァッ!!!

アァァァァァァァ!!!何故ぇぇぇぇぇぇ!!!

…父さん、母さん、お婆ちゃん、ごめんね。今までありがとう、ずっと大好き。

いやだあァァァァァァ――――――ァ゛ッ

それにみんなの事も、私は忘れないから、背負ってくから。

ヒィッお、お救いを…!お救ジィ゛――――――

覚えてるよ、みんなで、村の外はどんな世界になってるのかなって…話したよね。

マ゛マ゛アアアアアアッ゛
みんなの分も見て回るよ、私が全部見て回る。

私は両親と祖母の頭部を抱き抱え、村を歩きながら思案する
リオメンスカァは私で終わらせる
二度とこんな方法で、紛い物の神なんて誰にも作らせない
幼い子…私も幼くはあるけど、子供に罪はない。眠るように、痛みなく
そしてこんな事をした大人達は苦しみ抜け
喉を焼いて
爪先から腐らせて
臓物を引き摺り出してぶちまけて

四肢の骨を砕いて、獣の餌にしてくれる

こんな反吐の出るような平和に甘え育って生きて来た大人なんて、誰1人として許すものか

……魂魄探知…そこにまだいる。大人と子供が1人づつ

親子、ね…許しなんて間違っても求めない。ただ一方的に謝らせて貰うだけ

腐り切ったこの村に産まれて来た事が…あの子の不運

…ごめんなさい

そして大人の方は…余所者。て事はあの人も被害者の1人ではある

…?……!?嫌ァ！何でェェ!!!!

だから貴女も、眠るように、微睡みの中で殺す
…ごめんなさい

その後両親と祖母と、7年を共にしたみんなと、そして先生の遺体を燃やして
灰になった物を魔法で運んで瓶に詰める
これでみんなと一緒に見に行ける。みんなが私を見守っててくれる
後は村のあった森も全て燃やして、私は故郷を消し去った
その後魂魄探知で魂が最も密集してる場所に向かって歩き始め
大きな道に出た辺りで馬車に拾って貰ってから
冒険者になって、その日暮らしで生き始めた
私を子供だと侮辱する者は皆殺しにして生きた

彼等からしたら知りようも無い、だが私は、あの地獄を今でも反芻して生きてるんだ

酒を飲んで浮かれながら、馬鹿にして来る奴等を生かしてやる程心に余裕は無かった

そうして私は育ち、魔女と呼ばれ、畏れられるようになった

リオメンスカァは私で終わり、その名を広めるなんて以ての外

今の私は、両親から確かな愛を授かって産まれた私の名前は

リリス＝フローンだ――――――――――――――――

アハハハハハッ♡♡効かないねぇ!!どうしたのかなぁ♡？
っ…！呪術の無効化…舐められた時かッ！
なら、勝ち目は無い…！コイツが化物なのはとっくの昔に分かってる…
呪術による優位性が損なわれたとしたら…でも、まだ体は動ける
【鎮静呪術】…、最期まで足掻いてみせる…！

アハハハハッ♡♡
チッ…っ!?
すり抜けたっ！コイツは…!?
初めて…動揺したねぇえ!!!ンフフフッ♡♡そぉ…れっ！
ぐぅ、ぁあ!!
――コイツッ、私よりも…！
もっともっとモットォ♡♡♡
うぁあッ！ぅぅ…！

ふ――疾っ!!

あの男ッ今更何を…
――――ンフフフゥ♡効かなぁーい♡♡
ほらやっぱり、攻撃出来てな――
――ですよねっ！
っ!?っ～！なんの、つもりぃ？
取り敢えず回復したらどうでさ!?

ッ…アンタのせいで…！
――またピース同士でハマり合って…ずるいずるいズルい!!
ッ――――――がっ!!!ぁあ゛!!
だから止まってねぇ…♡♡ユウスケ君♡♡
――――――！
コイツ…態々――――――はぁ…
ンフフフ♡♡ため息吐いちゃってぇ～、もしかして…ときめいちゃったぁ♡♡？キャー／／／
…なわけッ！
キャッ♡♡
ぁ――――――マズい、しまった――――――
コレで…♡
ん゛はぁぁ、ッ――――――!!!
っあの野郎…！うぅ…――――――っ
――――――ァあ゛あ゛あ゛はっ゛！い゛い゛いはぇえ゛ぇ゛え゛ぇ゛!!!
カッコィィー♡♡♡女の子庇っちゃってぇ♡でもぉ…その情けない悲鳴はどうかと思うなぁ…？
何やってんのアイツ…相手の目的は私でしょ？
私1人死ねば逃げれるかもしれないのに…バカなの？
…何様のつもりかしらね
あれあれぇ？折角男の子が庇ったのにぃ？ドライな反応～！ユウスケ君がカワイソ～だよぉ？
誰も助けて欲しいだなんて喋っちゃいないのよ

でもぉ、あの状況で助けられたのは事実だよ？
この偽善者は自分から苦しんでるだけよ
酷い物言いだねぇ…？せめて助けようとした意志ぐらい、素直に感謝しとくべきじゃない？ねぇ♡ユウスケ君もそう思うよねぇ～？

、あ〝ぶぅぁぁぁあ〝!!!ん〝ん〝がぁあ〝あ〝！

ほらぁ～ユウスケ君もこう言ってるぅ！
…どれだけこの洞窟に居続けたのか知らないけど教えてあげる、こういうのは『ありがた迷惑』って言うのよ
知ってる♡所で……喋り方に伸びがないねぇ♡？案外動揺してる…とかぁ♡♡♡!?
っ――がぁっ！うぶっ！ッ――――！
ンフフフゥ♡♡危なかったねぇ？
ッ――――――アァァァ!!!
もう効かなぁい♡♡
っ！――――――チッ！
さっすがぁ♡♡
～～ぐぅっ!!!こんのぉ――――！
ざぁんねん♡♡♡
がぁ――――――んぐぅ！ッ～～――――!!
ンフフフゥ…♡♡今度こそ、だねぇ♡

～ッァ――――ッ！アァ…！ぁ――――――――

眼前に広がる、裂けた巨大な口――――――――

……ふふっ、私頑張ったよ。父さん、母さん、お婆ちゃん
みんな、私世界を見て回ったよ。本当にいろんな景色を見たよ
巨大な雪山の頂から見た世界は、雲海に包まれて幻想的だったよ
荒れ果てた平野の果てから見た海は、紅く綺麗に輝いてたよ

みんなで見たあの夜空より、もっともっと沢山の星が見える夜があったよ

私…生きて――――――

説明

スカァ＝フローン、又はリリス＝フローン
産まれた時から意識があった特異な子供
また産まれつき片耳が潰れていて、記憶力が良い
両親に愛されて元気に子供らしく成長し、学び舎で自分と同じように障害のある人達と出会い、友達になっていく
外の世界と基本的には繋がりを持たない閉鎖的な村で育つが村で過ごす日々が楽しかった為不満はなかった
村の特徴として嫁や婿を村の外から連れて来る決まりがある
これは後述の儀式を行うに当たって余所者を連れて来る事で意図的に違和感を持たせ反発を起こさせる為
また村出身の人間達は皆先祖が共通しており、血は限りなく薄まってはいるが全員親戚と呼べる
その先祖の特徴から身体に障害を持つ子供が産まれ易い傾向にある
先ずこの村を作った最初の男女、極小範囲ではあるがアダムとイブと呼べる２人
女は人と人とは別の「ナニカ」の子であり、肘から先の腕が２本あり
男は流れ人であり、謎の声から呪術を扱える力を得ていた
その男女が子を設け、そして子が孫を設け
小さいながら集団が出来始めた時、村を守る為に編み出した儀式によって産まれた者がリオメンスカァ
またの名を両面宿儺。リオメンスカァというのは長い年月を経て変化した名である
流れ人の男は儀式を経て両面宿儺たり得る男を作り、その男に自身の呪術を授け
そして最期は自身の心臓を与えて死亡した
儀式を行い、後継となる者を用意して、その呪術を心臓と共に代々受け継がせる

そうして増え続ける村人達に比例するようにより強力なリオメンスカァを作り村を守って来た

というのがこの村の真相
また身体の障害が軽微である程有力であるとされ
今回最も軽微だったリリス＝フローンが次代のリオメンスカァとして村の人達に愛されて育つ
リリス自身は魔法に関して稀代の天才すら霞む天性の才能を持ち
数多の魔法を操る事が出来、本人が緻密な努力を重ねる事で際限なく昇華している
それは肉体的、精神的に成熟した本編に於いても変わらない
年を重ね老婆となっても衰える事なく、若き日と変わらぬ速度で成長し続ける事が出来る。それ程の才を持っていた
だからといって魔法を扱えない人を卑下したり見下す訳ではないが、自身より劣っているのは常々感じている
１０歳の誕生日の夜、初潮を迎え村の人間に知られた後に儀式が始まり
友人を殺し、その後現在のリオメンスカァに師事し、呪術を継承する
その後両親を殺された事と併せて村に対する恨みから故郷を滅ぼし、村人も皆殺しにした
村自体に名前は無いのだが外の世界からはカーヌドの森、村と名称を付けられている
その後馬車に拾って貰った際、自身がカーヌド村出身だと話していた（カーヌド村の名称を出したのでなくカーヌドの村があるとされる森から来たと話した）事、その後村が周囲の森諸共消え去っていた事から唯一の生き残りと判断され
森に入って来た調査隊を度々死に追いやった謎の術を知るのも彼女のみとされた
その後冒険者となり、１０歳ながら侮辱した者は大人であっても殺して来た事や常識外れに極まった魔法の実力から魔女と畏怖される

日々を過ごす
本人も家族、友人、師との思い出を反芻し続け、心は常に孤独に生きている為それを気にする事は無かった
白金級のモンスターも、魔法の才能を与えられた流れ人も、彼女に勝つ事は出来ず敗北し、死んでいった
高い実力を持つ故に驕らず魔法の腕を磨き、真摯に向き合い努力していた為に神などから与えられた外付けの才能に嫌悪感を示す
また流れ者が女を侍らせ自身の強さに酔いしれているか、あたかも決闘かのような、生還前提の甘ったれた思考で挑んで来る事が多く
そういった者達に苛立ち例外なく殺しているので魔法士を志す者達にとって誰もが崇める頂点の一角でありながら彼等にとっての死神であるともされた
というのも村を出て僅か４年の時点で上記の有様、手を付けようものなら国王でさえ殺し、報復しようにも捕らえようにも誰も敵わない
本来、冒険者組合の規則に則り除名や追放の措置を取るのだが彼女の場合寧ろ公的に何処にも属さない様になる方が危険な為
首輪を付けるだなんて思い上がる訳でなく、せめて分かりやすい公的事業に属している事を表明して欲しい一心で所属するよう嘆願されている
本人としては分かりやすく日々生きる為の金を稼げる場所であり、抜けるつもりは毛頭無く
身分を問わず殺した者達も自身の琴線に触れただけであり、受付窓口の役員や解体事業を営む人達にはまともに接しているつもりだった
実際まともに接されてはいたが年齢に合わない手にかけた人数と何が琴線に触れるか分からない爆弾っぷりのせいで恐れられていた
恋愛に関しては経験が無いため初心であり、また割と乙女なのだが、本人が常日頃から地獄の日々を反芻し
自身のそういった甘さを意図せず性欲と共に殺し続けている為基本無頓着である
それに加えてリオメンスカァは自身で終わらせる。という強い意

識があり子を設けるつもりはさらさら無い
仮にも強姦、輪姦されたとしても犯された事に対する絶望よりリオメンスカァが、自身の呪術が世界に残る事を恐れて男達は当然皆殺しにするとして腹の子も迷わず殺すだろう
人を食したトラウマのせいで本来であれば肉を食う事が出来ず、動物性油脂を使用した食材も食べられない…が
自身を呪術で操り無理矢理食べる事で否が応でも栄養を摂取した甲斐もあり身体は大変立派に育った
この食欲はあの地獄を経験して尚魔法を極める為の健全な肉体を作る為、つまり強くなりたいというハングリー精神から来たもの
まぁ既に魔女として畏怖されていた為美貌に釣られる男なんていなかった。いたらいたで殺すだけなので結果オーライ

村を出て魔女としてリリスの名を広め３４年、４５の歳を迎えて１７歳頃の時と変わらない姿のまま本編の洞窟探索に参加
冒険者に登録した時のような爆弾っぷりは多少落ち着き、即殺す。でなく殺意を仄めかす程度になった
サルムとの交戦時は呪術の有無で優位に立ち回っていたが相手が悪く
攻撃によって動けなくなった所を捕食されその生涯に幕を下ろす
その瞬前彼女は両親家族、かつての友達に見せるかのように走馬灯に想いを馳せ、然る後に頭を砕かれた

呪術
魂に干渉する術である…と代々教えられるが少し違う
魂なき物質にさえ干渉し、気体すら操り、果ては形なき恐怖の集合体すら捕えられる
魂というより対象の本質や〝芯〟と呼べるような何かに干渉するのが呪術である
幅広く応用する事が可能で多種多様な呪術が存在する

・魂魄探知
周囲の魂を探る呪術、痕跡や肉体の一部等があればより正確に辿り位置を調べる事が出来る
また自身の魂を媒介に血縁者を探す事も、他者の魂を媒介に対象の血縁者を探す事も出来る

・鎮静呪術
自身の魂に干渉し、無理矢理にだが精神を落ち着かせる呪術。これにより不足の事態が起きても冷静に戦闘を続行する事が出来る
本編に於いて使用され落ち着かせたは良いが初心な心にお姫様抱っこが強襲して来た為その冷静さが失われてしまい、北上は知る由も無いが敗北する遠因となっている

・魂魄捕捉
魂魄探知で見つけた魂を捕らえて情報を得る、身体能力や肉体の可動域、そこから割り出される暫定的な物理攻撃威力や物理防御力、魔法の練度等様々な情報を得る
これにより酸素や二酸化炭素を明確に知覚し、干渉して操作する事で相手を窒息死させる事も出来る
気体に魂は無い？それはそう
また肉体を透視して筋肉や臓器の動きから先を読む某漫画のように魂から先んじて発信される情報を元に動きを先読みする事も可能とする
更にリリスの魔法に関する天性の才能が加わり対象の魂から攻撃力：aと防御力：bという情報を取得、自身にa＋1の防御力とb＋1の攻撃力を得る聖属性魔法を行使する事で確実に相手を上回る身体能力を得る
上記２つがサルムのマッハ１７７の速度にすら対応する秘密であり、相手の動きを先読みした上で強化した身体能力を明確にイメージ出来る想像力とそれだけ大きい恩恵を得る魔法を行使して尚有り余

る魔力を保有するリリスだからこそ可能な芸当
しかし四肢が機械製の義手だったサルムに対しては一挙手一投足毎に作動した仕掛けを捕捉し攻撃力：aの情報を取得して、即座に自身にa＋1の魔法を行使して防御する、と滅茶苦茶細かく行使し
特に銃弾が発射された時には位置、角度から受けるダメージが細かく変動する為弾丸1発ずつを補足しており、弾丸に合わせて魔法を重ね掛けしていた

・写魂呪術
捕捉した魂を物質に転写し、物質にダメージを与える事で魂の保持者にもダメージを与える呪術
分かりやすく？言うと呪いの藁人形とかそういうの
・呪魂御祓
他者から行使された呪術を打ち消す呪術
舐めた事で呪術を解析したサルムも行使する事で元の形なき恐怖の集合体に戻り攻撃をすり抜けるようになる
その度にリリスは魂魄捕捉で対象の芯を捉えるのだが攻撃が当たる瞬間に呪魂御祓を行使、無効化するイタチごっこになるので
呪術を破られてからは攻撃を当て、攻撃を当てられる瞬間に捕捉し芯に攻撃を試みたが
捕捉による先読みを含めても勘や経験でタイミング良く行使するリリスに対しより機械的に、最適最短のタイミングでサルムが行使して打ち消してしまう為に反撃は叶わなかった

・儀式
守り神とも、人を呪い殺す呪具であるともされる両面宿儺を産み出す儀式
あくまでこの村に伝わる方法であり、差異がある
手順1、身体に障害のある人間を用意して蠱毒を行い、生き残った1人の両親、友人を出来るだけ苦しませて殺す

手順2、殺した血縁者及び友人の血で染めた布で生き残った1人を包み現在のリオメンスカァ様のお膝元に送り継承させる
手順3、血縁者及び友人の無念、恨みの募る心臓を生き残った1人に食させる。この手順2と3は混同しても問題はない
以下の手順で世界を呪う次代の神、リオメンスカァ様が産まれる
これら儀式を行う際、生き残る1人が男性の場合は精通、女性の場合初潮を迎えてなければならない
またこの時、家族や友人だけでなくより負の感情があるとより良いとされる
長い事この呪いの神の恩恵で生きてきた村人はこの儀式に対し負の感情を強く抱かない為、上述の馴染みのない余所者を嫁や婿で連れてくる決まりが出来た
これらを経験してリオメンスカァとなった者は動物性油脂を含む食物、ひいては食事自体に強いトラウマを覚え即身仏になるかのように痩せこける事が殆どである
呪具として用いる場合は生き残った1人に心臓を食させた後ゆっくりとミイラ化させる事で完成する